



展示紹介

広重の藤沢・江の島	P 1
江島弁才天の護符～「弁才天及び十五童子像」	P 2
広重が描いた藤沢・江の島	P 3
二代目オニカゲ学芸員のページ⑩10周年にまつわるお話 浮世絵すり体験/ 浮世場なれ/編集後記	P 4

広重の藤沢・江の島

会期

2026年7月18日(土)～9月6日(日)



歌川広重「東海道之内江之嶋路 片瀬 自七面山見浜辺」

歌川広重は、江戸後期の代表的な浮世絵師の一人であり、名所絵の名手として知られています。出世作である「東海道五拾三次之内」が刊行されたのち、数多くの東海道シリーズを手がけました。

また、藤沢宿や江の島の浮世絵を数多く描き、その数は他の絵師を圧倒しています。広重が遺した浮世絵の数々は、藤沢・江の島の歴史を知るうえで貴重な資料でもあります。

本展では、広重が描いたさまざまな藤沢と江の島を通して、江戸時代における藤沢の景観の特徴を紹介します。広重の描いた藤沢の情景をお楽しみください。

江島弁才天の護符～「弁才天及び十五童子像」

鈴木良明（前鎌倉国宝館館長・藤澤浮世絵館運営委員会 委員長）

「江島詣」の盛んとなった江戸時代にどのような「護符」が作成され配付されていたのか。実は、この課題に対し明確な答えはないようである。ひとつに、この時期の護符類を収集し検討するに資料の少なさがあるろう。背景には護符の主な素材が紙であり残りにくい点や神仏分離を経て信仰面の変化もあったのであろうかと思われる。



【図1】「江島本宮岩屋」（岩本院）

ここに紹介する「弁才天及び十五童子像」は江島弁才天信仰の護符のうちで遺る代表的な護符（絵符）のひとつである。

絵像は八臂弁才天を中心にして15人の童子などを配する構図で簡素な木版墨刷りである。紙片の寸法は一様でないが、概ね縦40cm・横25cm程度のものが多い。

像容を見てみると、主尊である八臂弁才天は岩座上に座し、頭部には宝冠の上に鳥居をいただき蛇と老人の面を付してある。八臂弁才天の座下の左に大黒天と右に毘沙門天を配し（弁才天から見て左右）、さらにその下部に計15人の童子（7人と8人）を左右に分けて配置している。15人の童子はそれぞれ持物（升・筆硯、稻束・牛馬・船…など）を象徴させて描いてある。このような図像と構成がこの絵の一般的な形式であるようである。鎌倉時代に成立したとされる「偽経」の「仏説最勝護国宇賀耶頓得如意宝珠王陀羅尼經」に「宇賀神王」としてあらわれる尊主が、頭に宝冠と白蛇・老人面を有し、八臂にして各手に鉾・輪宝・宝弓・宝珠・劍・棒・鑰・宝箭を具足（武装）し、加えて持物を象徴した15人の童子を従えると説かれている。「偽経」に説かれる「宇賀神王」は「弁才天」と習合した姿として顕れ、わが国で独自に展開した弁才天信仰の形がこの絵符であるといえる。

ところで、江島で版行された「弁才天及び十五童子像」のいくつかを比較してみると相違があるのに気づく。例えば、弁才天を中心にした15童子の左右の配置人数、そして童子の配置順序も一様でない。このことは、江島における三弁才天の各別当や御師たちが各自に出版・配札活動のあったことを示していて興味深い。なお、15人の童子ではなく16人の童子を描く絵符も見られるが、江島では15童子となった訳を次のように伝える。むかし、建長寺開山の蘭溪道隆が江島参籠の時、弁才天の感得により一人の童子（乙護童子）を道隆に授けたので、江島では15人の童子になったという（『新編相模国風土記稿』「大船・常楽寺」項）。建長寺には今も「乙護童子」と伝える像がある。



【図2】「江之嶋」（江之嶋御師 宇田川武藤太）

※偽経 日本選述の經典

広重が描いた藤沢・江の島

江戸時代に東海道をはじめ日本全国に街道整備が進み旅人が増えるにしたがって、名所記や名所図会、絵図などの旅行ガイドが多数出版されるようになりました。藤沢宿の場面では、名所の遊行寺や江の島道の始まりである江の島一の鳥居が描かれ、藤沢宿が江の島詣への分岐点として知られていたことがうかがえます。

広重が保永堂版「東海道五拾三次之内」を制作する以前にも、喜多川歌麿や歌川豊広、葛飾北斎などが東海道シリーズを手掛けました。それらは北斎が描いた「藤沢 平塚へ三里半」【図1】のように、風景よりも人物に重きを置いた描写が多くみられます。



【図1】葛飾北斎「藤沢 平塚へ三里半」

広重が描いた藤沢

広重は、出世作である保永堂版「東海道五拾三次之内」(天保4-6年(1833-35)頃)を皮切りに、生涯で二十種類以上の東海道シリーズを手がけました。保永堂版の藤沢の場面【図2】では、遊行寺を背景に大鋸橋と江の島一の鳥居を描いており、藤沢宿のスタンダードな情景として江戸の人々に広まりました。保永堂版では、風景としての完成度が高まった作品が数多く描かれました。北斎の「富嶽三十六景」の出版とも相まって、風景主体の名所絵が出版されるようになります。



【図2】歌川広重「東海道五拾三次之内 藤沢 遊行寺」(保永堂版)

保永堂版の人気にあやかり、「狂歌入東海道」や「隷書東海道」など、広重による東海道シリーズが異なる版元から次々と刊行されました。広重は、同じ藤沢を描きながら、シリーズごとに季節や時間、天候、アングルを変えることで、見る人を飽きさせない工夫を凝らしています。

また、嘉永期(1848-54)には、人物を中心とした「人物東海道」や「美人東海道」などのシリーズも制作され、人物描写も巧みな広重の一面がうかがえる作品群となっています。

広重が描いた江の島

広重が描いた江の島関連の浮世絵は、現在確認できるだけで50点以上あります。広重は、同じ江の島でも、七里が浜からの風景や江の島の岩屋、女性の参詣する様子を描いた美人画など、さまざまなテーマで多様な江の島の姿を描き出しました。広重ブルーと称される広重が多用したベロ藍の美しさの際立つものが多くみられます。

【図3】では、広重は岩屋に押し寄せる高波をダイナミックに描いています。西洋の遠近法を使った浮絵の技法を受け継ぎながら、さらに、空や海などにぼかしを入れて色での遠近感を加え、自然に感じられる風景描写へと江の島の風景を昇華させています。

広重は、元来の御開帳に合わせて出版された江の島詣の浮世絵だけでなく、風景としての江の島の美しさを描き出しました。広重を通して広まった風景そのものの魅力を描いた名所絵は、他の浮世絵師たちにも強い影響を与えました。



【図3】歌川広重「本朝名所 相州江ノ嶋岩屋之図」



10周年にまつわるお話 浮世絵すり体験

藤澤浮世絵館では、開館当初から「浮世絵すり体験」というワークショップを毎週日曜日に行っています。開館からの10年間で体験者は1万2千人を超えました。また、これまで遊行寺や江の島、地域の図書館、はたまたスカイツリーなど、館外でもワークショップを開催し、さまざまな場で江戸時代から続く伝統的な摺りの技法を伝えています。そこで今回は、「浮世絵すり体験」でよく聞かれる質問をランキング順にご紹介しましょう！

第1位 浮世絵ってどうやってできているんですか？

細かい文字まで人の手で彫られていることや、浮世絵の色の数だけそれぞれ異なる版木が必要なこと、思いのほか摺るのに体力が必要なことに驚かれます。

第2位 色は何で作られるんですか？

江戸時代は、墨や植物・鉱物由来の染料、胡粉などが用いられていましたが、浮世絵館では現代に合わせて水性の絵の具を使用しています。

第3位 無料ですか？

「浮世絵すり体験」は無料で体験できます！お気軽にお越しください。

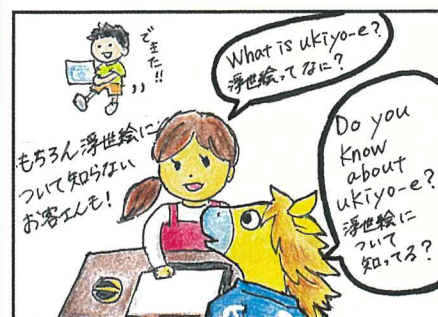
ぜひ、浮世絵すり体験にお越しください。浮世絵の魅力を体感してもらえると幸いです。

浮世絵すり体験

展覧会会期中 日曜日
午後1時～5時



「浮世絵すり体験」の様子



編集後記

広重の描く人物は、おしゃべりしたり、よく煙草をふかしたりしていて、江戸の日常にある少しのんびりした雰囲気伝わってきます。俳諧や狂歌などに親しんでいたこともあるのか、軽やかさが広重作品の魅力のひとつです。

今回、江の島に関連して、弁才天や牛玉宝印などの御札（護符）も展示しました。多様な護符の世界も合わせてお楽しみいただくと幸いです。

本誌の発行に際してご寄稿いただきました鈴木良明氏に、この場を借りて深く感謝を申し上げます。

編集・発行：藤沢市藤澤浮世絵館

【住所】〒251-0041 神奈川県藤沢市辻堂神台2丁目2番2号ココテラス湘南7階

【電話】0466-33-0111 【FAX】0466-30-1817

【開館時間】10:00～19:00（入館は18:30まで）

【休館日】月曜日（祝日、振替休日の場合は翌平日）

※その他、展示替えのために休館日があります

【HP】[藤沢市藤澤浮世絵館](#) で検索

【公式Instagram】[fujisawa.ukiyoe](#) で検索

